



## 「忠実な心を忘れない」

～神の国の力の現れを信じる教会～

「しかし、主が許してくだされば、すぐにでも行く用意がある。その時は、そのように思い上がっている人の語ることが、単に言葉だけのことなのか、それとも本当のことなのか、実際の行いによって見せてもらいたいものである。というのは、神の国は、単に言葉だけのものではなく、そこには力があるのである。」 第一コリント4章19・20節

パウロはこの第一コリント4章で、自分自身に与えられている神様からの使命に対して、どのような心を持って従っているかを証しています。それは、「忠実な心」です。

それは、自分と神様との関係は「主従関係」によって成り立っていることを自覚していたからです。私たちクリスチャンの生き方は、神様の恵みによって突き動かされて歩む生き方です。だから、私たちの欲望や願いによって生きているのではないということを自覚しなければなりません。「真理はあなたがたを自由にする」とイエス様は弟子たちに語られましたが、クリスチャンの生き方は、神の真理に従って生きる生き方ですが、それが、私たち自身を拘束し、縛るような生き方ではないということです。神様の恵みをしっかりと理解するならば、自分の欲望に生きることも神の使命に生きる方が解放された生き方であることを悟るのです。

しかし、コリントの教会はどうしても、その神によって生きるということよりも、キリストを信じる前の生き方に戻ってしまって、その肉によって、この世のならわしの中から抜け出せないまま、生かされることに慣れてしまっていました。ある意味、私たちはこの世の生き方に従って生きることに對して、闘うことなしに、自由を手に入れることはできないのです。その闘いとは、自己との闘い。神に対して忠実であろうとする闘いです。私たちはロボットではないので、自分を自分で従わせるということは簡単にできないようにできています。洗脳ではありませんので、自分の意志で従うということです。強制力がありませんので、自分で自分を従わせるしかありません。それは本当に骨の折れる仕事です。

イエス様もおっしゃいました。「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通過する方がもっとやさしい」。弟子たちは質問しました。「では、一体誰が神の国に入るのでしょうか?」。それに対して主は、「人にはできないが、神にはできる!」とお答えになりました。私たちが自分自身で神に対して忠実であることは不可能なのだということです。だからこそ、「神の国は言葉ではなく、力である。」と主はおっしゃったのです。「言葉(ロゴス)」は頭だけの人間的な限界の世界。しかし、「力」は神様の力、天地宇宙をお造りになった実際的な爆発的な力です。それには限界がありません。無限の力を秘めています。このお方に頼るなら、あなたは本当の自由を手に入れることができるのです。